

視察の実際

日程：平成24年1月3日～9日

テーマ：2012年1月 欧州 地域ケアの実際と教育 自主協力グループ視察研修

目的：質の高いコミュニティケアのエッセンスについて学ぶこと。コミュニティケア専門家の教育〔基礎・卒後〕、現場と教育の協働・連携、在宅ケアで今後大きな課題となる認知症やターミナルケア等。

参加者：医療に関わる多方面の専門家22名

研修企画：村上紀美子氏（医学ジャーナリスト）

【イギリス・ロンドン・シティ大学】

School of Health Sciences City University London

West Smithfield Campus 20 Bartholomew Close London EC1A 7QN

看護学科の教授のレクチャー・意見交換（通訳あり）や学生と交流

主に、イギリスの基礎看護学教育の現状と課題について、看護学を教授する教員の現状と課題について報告する。

○イギリスの基礎看護学教育

イギリスにおける0歳から18歳までの一般的な教育プログラムと、その中での看護学教育の位置づけ、3年間の看護教育内容（入学時から4コースに分かれる）、日本のような国家試験はなく、教育機関が資格認証を担っているため、教員の成績判定が看護師資格取得につながる。

イギリスでは、看護学に限らず、小人数制の教育は基本であるが、特に臨地実習（病院）の質を重視しており、必ずマンツーマンで学生が実習できるように教育環境を整備している。

メンター、プラクティス・ティーチャー、ティーチャーと3層構造になっており、各実習施設には、実地指導するメンター、実習の実地指導だけでなく評価ができるプラクティス・ティーチャーが配置されている。

プラクティス・ティーチャーは、大学教育（講義やグループワーク）等におけるファシリテーター役も担っている。

また、実習等の学習の総合的な判断のできる、ティーチャーである。学生の自己評価ができるように、リフレクションの時間を重視している。それぞれが、連携・協働しながら教育の質を担保している。

来年度以降、看護師は、学士教育のみとなる。また、看護師になってからも、能力に応じて評価される。レベル1～9まで。日本の看護教育は、イギリスでは評価されていない。昔（10年以上前）は、日本人は、日本の看護教育を受けていれば、イギリスでの看護教育を免除され、看護師免許は比較的簡単に取得できた。

現在は、日本の看護教育のカリキュラムは、臨地実習時間数の減少等とイギリスでは低く評価されており、日本人がイギリスで看護師免許を取得する場合には、教育を受けなおすこと、高度な英語能力を要する等、条件が非常に厳しくなっている。

○イギリスの看護学を教授する教員

教員は、現場（病院や保健センター等の保健医療福祉の実践現場）とかけ離れた教育をしないよう、また、自己の実践能力を磨くように、必ず、現場に足を運んでいる。ある教員は、1週間のうち、12時間は現場に行っている。また、ある教員は、大学と現場の2重に席を置いているものもいる。各自、自己の実践能力を保つように、自由裁量で、現場とのつながりを担保している。これが当然のことであると認識している。



レクチャーを担当したシティ大学の教員達



視察先での善生

【マクミランナース（がん患者支援専門看護師）のレクチャー】

イギリスで、マクミランナース（がん患者支援専門看護師）として働いている日本人の看護師から直接話を伺った。

日本の病院看護に疲弊して、10年くらい前にイギリスに行った。周囲の助言があって、現在の地位と築いたそうだが、実力があれば、周囲が認めてくれるので、どんどん働きやすくなっていく。イギリスでの永住権も得たので、日本に帰って働きたくないということだった。

日本の病院の看護職の離職対策を考えるにあたり、国による制度やシステム、文化、人々の価値観の違いはあるが、こうした海外で活躍する日本人の看護職から、海外での看護職体験を聴取することで、日本における現場の環境を改善する一助となりえて、有意義である。

【イギリスのロンドン・マギーズセンター（がん患者支援センター）】

Fulham Palace Road, London W6 8RF Charing Cross Hospital

CEO かつ がん専門看護師のローラさん、訪問先のセンター長かつ がん専門看護師のバーニーさんからレクチャーがあった。

また、施設内を見学した。

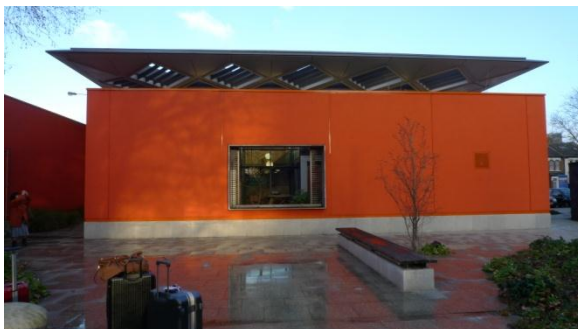
誰もが我が家に帰ってきたような、あるいは、友人宅に招かれたような空間で、一人一人を尊重し、自然に相談できる空間を目指す。また、住環境へのこだわりは、すごかった。

がん患者の診断・治療等に係る心的ストレス、ダメージは計り知れない。それを解消するために、地域密着、患者の主体性をすべてに優先させて尊重する姿勢、小人数制の専門職スタッフで運営する等のコンセプトを決して崩さない。

イギリス在住のがんを体験し、マギーを利用している日本人女性からもレクチャーがあった。

自らもがん体験者であるため、日本の病院や相談窓口は、非常にがん患者にとって敷居の高いものであり、患者の生活を重んじた相談になっていないことは体感している。

日本にも、高度医療ばかりを追いかけるのではなく、病気や障害をもっても、人間らしい生活を営めるよう支援するような、マギーズセンターのようなコンセプトの相談機関を各地に設置する方向で動いて欲しい。新宿区にある「暮らしの保健室」（秋山正子氏）はマギーズセンターをモデルにして運営している。今後、視察に行く予定。



マギーズセンター概観

(色、スタイル、空間の使い方等、バランスが見事であった)



左がバーニーさん、右がローラさん

【オランダ Buurtzorg】

Buurtzorg Nederland (在宅支援事業所)

Postbus 69 7600 AB ALMELO Inschrijfnummer KvK 08142671

Buurtzorgとは、民間の在宅支援（訪問）事業所であり、オランダの各地域に設置されている。一つ一つがチームを組んでおり、在宅支援に係る専門職の集合体である。

その事業所の看護師一人について、同行訪問した。



Buurtzorg の一チームスタッフ

左端は善生、右から2番目は同行訪問の看護師
その隣は、インターンシップ中の看護学生



Buurtzorg の CEO ヨスさん

レクチャー中。

【往路 Buurtzorg Team Scherpenzee への送迎】

Amersfoort 駅から、看護師の Marja Feenstra さんに連れられて、Marja さんの車の後部座席に乗せていただいて、約 15 分ドライブしながら、Buurtzorg Team Scherpenzee の事務所へ向かった。

車中、沈黙が長く続かないように、旅の英会話本をみながら、Marja さんに話しかけた。

互いに、通じなくて苦笑したり、「difficult!」を連発したり、まわりの景色が田園風景になっていくので、「beautiful!」といたり、頭に浮かぶ英単語を発した。

必死だったので、何をどう話しかけて返答していただいたのか、よく覚えていない。たまに、運転中の Marja さんが、ハンドルを握りながら顔を後ろに向けて話しかけられた時は、こちらの声に耳を傾けて下さることがわかった嬉しかったけれども、前を見て運転して欲しいと思った。また、事務所までの道中の風景は、進むにつれて、家もまばらになって、広々とした畑?が多くなった。田舎の村だからとおっしゃっていた。すかさず、素敵な風景ですと返答したつもりである。

また、Marja さんから、車中、口頭とボディランゲージで、同行訪問では、写真は撮らないで下さいと指示があった。そのつもりでいたが、実際は、西村さんは、ケースの快諾を得て、自分のデジカメで訪問ケースと一緒に写真を撮ってもらったそうだ。こちらは、自分のデジカメでは撮らなかったが、同行訪問させていただいた看護師の Cocky さんは、自分のデジカメを持ち歩いて、ケースと私とインターンシップ中の看護学生と撮ったり、看護学生がみんなを撮ったりしていた。気さくに応えて下さった。

Buurtzorg Team Scherpenzee (チーム・スケルペンゼール) スタッフは、写真のとおり。



自己紹介で、氏名と看護大学の教員であることを伝え、それは、伝わったようだった。「あなたの専門は何?」との問いに、ジェロントロジカルナーシング、エルダリーナーシングと言ったが、発音が悪いのか、通じなかった。ケアマネジメント、コミュニティケア等と単語を言ったが、腑に落ちない表情をされていた。適切な回答とならなかったことだけはわかった。すぐに、わからないので先に進もうという雰囲気になった。

ブレッド(伝統的なパン)砂糖の塊が入っていた。

コキーさんや他のスタッフが、ベリースイート、

大丈夫か?と心配そうな顔をしたが、一切れ食べきった。かえってきたら、チョコレートを1個下さった。

【同行訪問】



- ・ 看護師 Cocky Buys 氏
- ・ 看護学生 (ガーナ出身、ベルギーの看護学校の学生、インターンシップ)

【訪問看護活動の書類】

用紙：氏名、年齢、性別、診断名、依頼までの病状経過、訪問記録(重要な出来事は記述)、ケア計画シート(問題点、目標、ケアプラン、評価、バイタルサイン表(血糖等も)、薬チェック、Buurtzorg Team Scherpenzee の訪問スタッフの顔写真(配布用))

【事例1】80歳代後半、女性、手指は関節リウマチのように、関節が変更し、節が腫脹していた。気

管を広げて呼吸を楽にするため、点鼻薬を吸入実施。気管支喘息、COPD。

今回は視察のための訪問（経過観察、コミュニケーション）。事例の女性は、日本から来た視察者に以下のプレゼントを下さいました。

その代りに、事例の女性にお願いされて、ハードカバーのノートへ「日本語で氏名を書いて下さい」と言われるがままに、「善生まり子」と漢字・平仮名で書き、日付と Thank you very much と書いた。



プレゼントの箱。オランダカラーのリボン！



カレンダーが入っていました！素敵な風景！

すぐに開けることができなかったので、日本に帰国してから広げました。

すると、視察した年は、「2012年」であったのですが、カレンダーは「2010年」。いろんなスケジュールが書き込んでありました。

追記：靴はベッド、風呂以外は室内でも常時履いている。

【事例2】

60歳代女性。糖尿病、肺がん等がある

「彼女はハートの熱い看護師さん」手でハートを作って、心臓のところにあてて教えて下さった。

事例宅の玄関の開け閉め（プッシュ暗号方式）・セキュリティも任されている。学生さんが暗号を入力して、玄関を施錠した。



【ランチ】同行訪問させていただいた看護師（2人）Cockyさん、Cobiyさんら、Buurtzorgの一部の方々と視察者全員でランチを共にした。



看護師 Cocky さんと一緒に ランチ



看護師の Marja Feenstra さん（左）
Buurtzorg のヨス代表（右）



ヨス代表は、この地域（アメルスフォールト Amersfoort）で活躍していた Marja さんに、Buurtzorg は受け入れてもらえるか、やっていけるだろうかと相談したそうだ。Marja さんは、「だいじょうぶ。できるわよ。」等と、ヨス代表の背中を優しく押してくれたそうだ。とても心強かったそうだ。

事業所の CEO ヨスさんのレクチャー。オランダの保健医療福祉の現状と、現在に至るまでの経過について、日本のようにサービス単価で給付を決めるのではなく、1 ケースに必要な給付を算定している。結果的にその方が、効率性が高いことが立証された

そうだ。また、世界的に有名なデンマークの医療の質評価をする機関から、オランダの医療の欧州 1 であると評価されている。オランダ人の看護師に対するイメージアップため、TV・ラジオ等のメディアを使って、子供たちに、看護師のよさをアニメや物語等で自然に伝えていくような仕掛けをしている等、様々な戦略を伺った。

(視察参考文献)

雑誌「コミュニティケア」(株)日本看護協会出版会)の『コミュニティケア探訪』シリーズ
執筆 村上紀美子氏

2010年3月：英国のケアホーム

ケアホームのよい実例を集めて広めて“人と人をつなぐケア”を大切に QOL 向上!

英国のマイ・ホームライフ・プログラム トップリーダー ~ジュリー・メイヤー 教授(ロンドン)

2010年9月：ロンドンの地域ケア

研究成果を実用的な手法やスキルに生かす! バッドニュースの伝え方と看取りケアパス

英国ロンドンの地域ケアリーダーたち 62

2010年11月：フランクフルトの在宅ケアとよろず相談所(管理についての原稿は添付)

1人暮らし高齢者を支え続けるドイツの在宅ケアとよろず相談所

フランクフルト市のソーシャルステーション~訪問看護師ベーベル・ヘンさん

2011年5月：オランダ Buurtzorg 同行訪問

訪問先でのアセスメントで柔軟対応実力派ジェネラリストチームの力オランダ“Buurtzorg”の在宅ケア~看護師オランダ・ホフテさん

2011年7月：オランダ Buurtzorg 管理運営

チームが進める人間的トータルケアは利用者にも働く人にも大好評

オランダ“Buurtzorg”の在宅ケア(その2)~Buurtzorg 代表地域看護師 ヨス・デ・ブロックさん

2011年11月：ロンドン看取りケア

“最期まで家で”を支える 夜間の看取り付き添い 行政と医療者と民間グループが助け合って英国ロンドン北部地域の看取り支援ネットワーク